

## 小学校における自然探索活動の実態と指導の在り方

所属校：多摩市立大松台小学校  
氏名：松本純子  
派遣先：東京学芸大学大学院

キーワード：環境教育・観察活動・自然探索活動

### 研究の目的

本研究では、小学校における自然観察活動を類型化し、その中でも特に低学年での自然観察活動の一形態である「自然探索活動」や自然に親しませるための指導の実態を探りながら、どのような指導が効果的なのか、指導の観点や支援の方法について検討し、実践を通して自然に親しませるための指導方法を提案することを目的とする。

この目的を達成するために次の3点を目標とする。

- (1) 小学校では「自然探索活動」や自然に親しませるための指導がどのような場面でどのように行われているか実態を明らかにする。
- (2) 「自然探索活動」や自然に親しませるための指導における効果的な方法について実践を通して検討し、これらを取り入れることで生じる児童の変容について明らかにする。
- (3) 小学校で実践可能な自然に親しませるための「観察活動」「自然探索活動」の指導の在り方について提案する。

### 研究の方法

#### 1 教師に対する意識調査と実態調査

教育現場での「観察活動」「自然探索活動」の指導の実態を明らかにするために、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いてインタビュー調査を行った。

##### (1) 調査対象者

東京都公立小学校の教師 11名

##### (2) 調査手続き

M-GTA の理論サンプリングにより抽出したプロフィールをもつ調査対象者に調査依頼を行い、半構造化面接によるインタビュー調査を行った。内容は、承諾を得て IC レコーダーに記録し逐語録を作成、分析資料とした。

##### (3) 分析手続き

逐語文字化した資料をもとに、一覧に整理しナンバーリングを行った。更に、分析ワークシートを使って、概念をまとめながら、概念間の関係（カテゴリー）を

検討していった。

最終的には、生成した概念とカテゴリーとの関係で分析の全体像を確定し、結果図と要約であるストーリーラインの二つの形でまとめた。

#### 2 実践研究

本実践研究は、よりよい実践はどうあるべきかを授業研究を通して探っていくものである。はじめから明確な枠組みについて検証するのではなく、アクション・リサーチ（以下 AR）によって、最終的に効果的な指導方法の枠組みを作っていく。

授業を組み立てるに当たっては、

研究協力者と実践者との関連における AR

実践者と児童との関連における AR

調査研究と実践研究との関連における AR

という3つの相で、計画・実践・評価・修正・適用の各段階において柔軟に他者の意見や助言を取り入れ、改善を目指していった。

実践研究の柱は、月1回の「自然探索活動」と常時活動の「季節のニュース」である。

### 研究の結果

#### 1 インタビュー調査の結果

本調査の分析から、以下のことが明らかになった。

- (1) 現場の教師は、自然に親しませる活動や自然探索活動、観察活動の意義として、自然の美しさ・素晴らしさ・不思議さ・命の尊さを感じる感性を培うことと同時に「実体験」を通して学ぶことを重視している。
- (2) 自然にかかわる指導は、これを目的とした教科学習の中で行うだけでなく、日常的に教科指導や生活指導の中で意識付けされている。この際、自然の事柄を重視し、取り上げようとする教師の意識が、これらを「隠れたカリキュラム」として位置付けさせている。
- (3) 児童の認識を高めるための手だてとして、「実体験」するだけでなく、これを発表や作文といった表現活動によって「言語化」をすることで「意識化」させていくことが肝要であり、この過程で教師の言葉がけや、児童同士が共感しあう場面の設定が重要である。
- (4) 環境教育に関して若手教師は、どれだけ自然が豊

かかといった勤務校の立地条件よりも、先輩教師の助言や勤務校の指導計画の影響をより強く受けている。

(5) 若手教師が、自己の指導に手応えを感じたり、意欲を強くもったりするためには、学びと共に児童の変容を目の当たりにすることが重要である。

## 2 観察活動の類型

観察活動の類型については、先行研究の検討から、以下のように考えた。

観察活動は、教科、「総合的な学習の時間」等で広く行われているが、これらは、題材、場所、回数等でいくつかのタイプに分類できると考える。

まず、特定の題材についての観察(「題材指定観察」と題材を児童が主体的に選択できる自由な観察「題材自由観察」)がある。もう一つは、特定の課題の下に行われているか(「課題指定観察」) それとも課題は自由であるか(「課題自由観察」)である。「題材指定観察」「課題指定観察」は、主に理科や社会等における観察が挙げられるだろう。一方、「題材自由観察」「課題自由観察」は、生活科や「総合的な学習の時間」の中で自然に働きかけながら自然に親しんだり、身近な自然に目を向けたり、「総合的な学習の時間」の課題設定の段階で課題を発見したりすることを目的に取り入れられている。生活科や「総合的な学習の時間」中での環境教育における観察の場合、この後者の場合が多いと思われる。

これらを組み合わせると、観察活動は、

- 自由観察型(課題自由・題材指定観察)
- プログラム型(課題指定・題材指定観察)
- 自由探求型(課題自由・題材自由観察)
- テーマ追求型(課題指定・題材自由観察)

の4つに分類できる。

本研究のテーマにもなっている「自由探索活動」は、題材を児童自身が自由に選択できる「自由探求型」又は「テーマ追求型」の活動に当たる。

## 3 実践研究の結果

### (1) 自由探索活動の変容

興味をもって、探したり、関わったりしている対象を見ると、はじめのうちは、動植物を発見することだけだったのが、その形態や生息環境、食物などにも目を向けるようになった。また、観察対象の広がりも見られた。生物だけでなく、「木の棒」や「雨の粒」等も広く観察対象になっていった。このことは、自然の物を利用した遊びへと発展していった。それと同時に、2～3人程度で探索していた集団が、遊びを中心に大きな集団へとダイナミックに移り変わっていった。

### (2) 常時活動「季節のニュース」に見る児童の変容

「季節のニュース」は、児童が発見した自然に関する事柄を「朝の会」で発表するもので、実物を示して発表し、質疑応答を行うものである(発表数が多くなり、7月からは児童の意見から観察カードで発表し、質問や答えの付箋紙を貼り合うことで意見交換を行う形式に発展)。

発表の中で、児童は自己の言葉でその時点での認識の一端を表現するが、はじめのうちは認識の誤ったものも出てくる。この際、教師は児童の事実認識が高まっていないうちに知識を与えるのではなく、考え方や言葉の意味を整理することが重要である。

このような支援の下、実体験の積み重ねや発表のやりとりの中で、児童は学び合い、誤った知識も作り替えられ、確かな事実認識を獲得していった。

### (1) 常時活動と教科指導の関連

児童の中では、教科指導で学んだことも、登下校で見聞きする物も放課後の遊びや読書から学ぶことも全て一つの意識の下で認識されていく。

教科で学んだことは日常生活で生かされ、日常生活で生かされたものは、しっかりと定着し、また教科の中に生かされていくといったスパイラルな関連を「季節のニュース」の発表や日記の記述の中で確認することができた。

## 考察

「徒党時代」という小学校中学年の特徴が、消失したと言われて久しいが、本実践研究の中では、この段階へ移行する姿が認められた。月1回の「自然探索活動」の中で学校等の身近な環境が自分たちにとって馴染みのある遊びのテリトリーへと変貌していった時、この年代の児童の自然な姿が立ち現れてきたと考える。これを見ても、低学年期におけるこのようなある程度自由さのある活動の意義は大きい。ただ、幼児教育と違って全くのノンプログラムというのではなく、表現活動を通して観察活動の萌芽をとらえ、認識を確かなものにしていく必要はある。自然にかかわる指導、特に低学年では、年間を通して四季の移り変わりと共に様々な形で指導していくことが必要である。その際、児童の実態に即して、時間的に無理なく、教科や日常生活と密着できる例えば「季節のニュース」のような活動を取り入れることが望ましい。

また、この常時活動と教科指導で扱われる題材をできるだけ意識的に関連付けることが、児童のより深い理解や認識を培うことにつながると考える。